

ふ子供で、寒暑の氣候にも抵抗し得る、血色のよい、活き／＼とした子供を仕立てるのを理想としたいと思ふのであります。

## 注意の話 (承前)

文學博士 元良勇次郎

### (六) 讀書と注意

(イ) 注意集中と其の背景

(ロ) 讀書の場合

注意の集中といふことは、單に精神作用のみで説明することは出来ぬ。其の背景たる生理状態が大に影響する。されば注意して讀書するにしても生理状態の變化によりて早く解し得るときは遅き時との別もあり、亦注意のよく集るときと、集りの鈍きときのあるのは明かである。次に讀書の場合に於て、其の生理的状態の影響が其の氣分に關係してそれから作用に鋭鈍を生ずると云ふこと

の全く外に、尙ほ次の如き二ツの場合がある。それは現に讀みつゝあるときの事柄を前以て知つて居るといふ場合は餘程早く了解して來ることである。又一ツは何回も重ねて讀んで居れば次第には了解して來ることである。一讀よりも再讀、再讀よりも三讀と次第に難解の文章も了解することが出来る様になるものである。讀書百回意自通すと云ふことは虚でないのである。讀書百回意自通すと云ふことは虚ではない。

### (七) 背景

背景といふは前述の如く一面に於て生理的作用が精神的注意作用に及ぼす影響を名づけて云ふたので、教育上に於ては最も此の修練に力を用ひなければならぬことである。如何によく教授し訓練して行かうとおもつても、單に精神的方面のみの教授訓練では何等の効はないのである。そこで私が拵へた注意練習器は實は其の用に立てんが爲めである。然るに世の人はあの器械を誤解して、單

に低能兒ばかりに用ふべきものと考へられて居るけれど、それは大なる誤りで、私が彼の注意練習器を拵へた目的は第一に注意作用を律的に確實ならしめんが爲めと、第二に變化の中に統一を有たしめんが爲めである。あの練習に依りて不活潑の者が活潑になり不整頓の者が整頓する習慣を得て居る決して低能兒特設の器械でなく一船教育に應用させたいのである。

(八) 研究と注意

(イ) 注意の分配

(ロ) 研究と其の背景 (疑念と假説)

(ハ) 其の證明法

凡て何でも研究といふときには、必ず注意作用が活動しなければならぬのは分つたことであるが、中にも注意を單に一點に集むるのみでは足らないので注意の分配といふことが大なる必要條件である。例へば風の吹くのを見て直ちに氣象の事を考へ、或は蜂の飛ぶのを見て直ちに博物學上の研究

を重ねて行くといふが如き皆氣を配ることである次に研究には決して直ちに信じきつて仕舞ふことは禁物である。信じきるといふことはかぶれることで、物にかぶれるは所謂とらはれることである、それでは眞の研究は決して出来るものではない。即ち常に反對に疑念を起して行くと云ふことが何の研究にも最も必要である。それと共に假説を立てるといふことが又大切な事である。疑念を起しては反對の方面に向つて試験して見て行き、次第に其の疑念の差し挿むべき餘地がなくなるに至つて初めて確乎に證據立てらるべきであると共に、一方には常に一つの假説を立て、其れに向つて研究して行く、即ち或る所期の據るべき方向を假りに定めておいて、研究を進めることが必要である。例へば千里眼等を研究するには一面に於ては大なる疑念の下に試験を進めて行き又一面には假説的目的を定めて研究を進めべきものである。而して後始めて眞相を明にすることが出来る



(二〇) 交際と注意

(イ) 讀心作用

(ロ) 同情と反情

(ハ) 禮法

所謂讀心術といふ意義ではないが、凡て社會に立ちて人と交際して行くには、其の相手の人の心を察知するといふことが必要である。それには先づ自己を省みることが大事である。即ち自己の經驗(苦しんだ事、樂しんだ事)によりて推察することゝが第一である。併かしそれも、自分に僻念があつてはならぬ。何處まで虚心に自己の經驗上より推して察せねばならぬ。兎角人生といふは複雑なものであるから一々論理的に成り立つては居らぬ。理窟以外の事のみが多いのだからこれに處して行くには、何處までも經驗を基として判じて行かねばならぬ事が多いのである。

次ぎには同情といふことが必要である。同情を以て人に接し人に交つて行けば自然と其の人を知り

人も亦吾を知つて呉れるものである。例へば犬好きなき人には犬は自然と能くなづくものである。言語は通せんでも何等か犬にも感ずる所があるに相違ない。況んや人と人との間に於てをや。尤も同情心を以て接して皆が皆に直ぐ様相親しむ様にはならぬけれど終りには必ず人も吾れを知り吾も人を知りて、互に融和するものである。反情的意思を以ては到底社會に於て立つて行かるゝものではない。

然らば同情のみで社會が渡らるゝかと云ふに、さうも行かぬ。複雑なる社會には所謂通り一邊といふが如き交際も多々ある。それには先方の感情を害せない程度の交際をせねばならぬ。それが即ち禮法であつて、虚禮は何の効もないが、斯の如き意味の禮法といふものは最も必要なことである。

(一一) 精神修養と注意

(イ) 僻念消滅

(ロ) 悟道の境

(ハ) 注意は病的現象なりとの説  
(ニ) 注意と拘泥との別

精神修養上如何なることに注意すべきかといふに第一僻念を去るといふことである。所謂佛教でいふ所の妄念を去るといふことが必要である。僻念を持つ事は人との交際上に於ても最も忌む所であるが、自己修養上に於ても最も邪魔物である。僻念のある人は當底宇宙の眞理を解することが出来ぬのである。此の僻念を消滅することが出来て、始めて所謂悟道の境に入ることを得るのである。悟道といふことは色々に云ふが先年永平寺の役僧の言ふたことで能く徹底して居るとおもふ言がある、それは悟道とは「心中更に滞りのないこと、それも川に清らかな水の流るゝが如しだ」といふたがこれはよい説明だと思ふ。兎角色々な僻念があつては心に常に何か停滞して居る様でスラ／＼した氣持になることは出来ぬ。それから佛蘭西のリポーといふ人は斯う云ふて居る「人の心の健全

なといふことは心にサラ／＼滞りのないことだ」と、つまり同じ意味である。併かしリポーが注意といふことを下げずんで「注意は元來病的現象なり」といふ説を立て、居るのは間違つて居る。或は一應は如何にも尤もの様に聞ゆるけれど、能く考へて見れば、注意といふこと、僻念といふことを混同して居るから、そんな説を立てるのだとおもふ。勿論注意といふことは滞ることだ、事物に一種の拘泥をすることではあるけれど、僻念とは違ふのである。山の中にでも住んで居て、只一人木實草根でも背めて居るのなら兎も角も、此の複雑なる社會的生活には誰れも色々の俗務がある。此の俗務の中に於て、更に何等の拘泥することなく、即ち注意することなく生存せうとした所がそれは到底出来る事ではない。尙ほ且つ吾々が一つの學問を研究するといふ時には何處までも執念に注意することが必要である。即ち解決を得るまではあくまでも注意を重ねて行かねばならぬ。

併し一旦道理が明になつてからは、更に拘泥するの必要はない。道理が明になつても矢張り拘泥して停滞して居るといふことになる、即ちそれが僻念である。即ち正當な注意は修養して何處までも發達させねばならぬが、僻念を去る能はずして、一所に何日まで停滞して居る様のは、修養上大に避けて行かねばならぬ事である。

(心理學通俗講話會講演)  
大要文責記者

### 自己活動の原則に就いて

和田 實

子供と云ふものは自ら働く爲めに益伶俐になり、益丈夫になつて、所謂、發達を遂げるものであると云ふことは自己活動の原則と云つて幼児教育上實に大切な理窟であるが、物は凡べて過ぎたるは及ばざるに如かずで、兎角一方に足り過ぎて困るのである。此自己活動の原則なども、頗る重大

なる原則には違ひないが、之を奉ずる人の心々に因つて、或は飛んでもない取り違ひがないとも限らぬ。殊にフレーベルの云つた言葉にも「子供の生活と云ふものは自我を發現することより外にない。彼の生活は種々の材料を以て自己の内心の力と云ふものを顯はすことより他にないのである」と云ふことがあるので、世の多くの幼児教育者は子供が何等かの發表的活動をするのを喜んで、積木、色板、豆、粘土など種々の材料を興へて、頻りと彼等の工夫や細工を奨励して居る。勿論、是等は奨励すべき筋のものではあるが、併し翻つて、果して是のみで幼児教育と云ふものが完璧のものであるか何うかと云ふことを一考して見ると其處に、多少戒めねばならぬ點の存在して居る様に思はれる。

元來フレーベルは十八世紀奮風一洗の時代を受續いで、盛に新思想の横溢し始めたる十九世紀の中國に生れたが爲めに、其教育上の意見も自ら中世